



相原事務局長の

ナチュラル

Natural Note

のーと

vol. 5

「投票へ行こう」と思えるストーリーづくりが必須

あらためて、なぜ投票に行くのか。職場や地域で「投票へ行こう！」運動にどう取り組むのか。「未来を変える」ために労働組合はどう情報発信すべきか。前日の連合政治研修会での講演を受け、今、私たちは何をすべきか、相原事務局長に聞いた。

私たちの「一票」が未来をつくる

「まもなく統一地方選があり、夏には参院選」。

私たちは、職場や地域で「投票へ行こう！」と呼びかけている。ただ、世の中には、自分が投票しても政治は変わらないと考える人も少なくない。選挙に臨むにあたって、なぜ投票に行くのか、その意義を整理し、心構えを持つことは、今まで以上に重要と考え、連合政治研修会を開催した。

「なぜ投票に行くのか？」という問いに、講師の村尾信尚教授は「私たちは投票券と日銀券という2つの『券』で社会を動かすことができる。そして、来たる選挙の対立軸は、保守かりベラルカではなく、今日か明日かだ」と答えてくれた。問われているのは「未来の選択」であるという問題意識は、まさに私たちのそれと重なり合う。

今を生きる私たちは、今の時代に最も望ましい政策を選んでしまいがちだ。ある意味、合理的な行動とも言える。けれども、今を生きる私たちの一票は、実は次の時代をつくる一票でもある。時に、苦さを感じても、今だけでなく、次の世代のため

なりの考え方を持つという、言ってみれば当たり前のことだ。ただし、日本では、そうした当たり前を習慣づける機会が体系化され社会にビルトインされてこなかった。今の大人たちの責任と言っても過言ではない。大きな反省材料だ。身についた投票行動は、広く社会を見渡す力を養うことから自ずと養われるものと考えたい。その意味でも私たち連合の役割をなお一層発揮しなくてはならない。

情報を絞る、目線を同じにする

「未来をつくる一票、そのことをどう発信していく？」

「発信の仕方」についても、村尾教授から貴重なヒントをいただいた。

情報を絞る、目線を揃えるという点だ。翻って、今の労働組合の情報発信は、どうだろう。あれもこれもと詰め込んで情報満載。「こうあるべき」も、時に、届かせたい相手からは「上から目線」と映っていないだろう。新聞、テレビ、インターネット、SNSと、さまざまな媒体から常時情報が溢れ出す現代。そんな時代に、私たちが本当に伝えたいことを伝えたい人に届かせるには、思い切った情報を絞る重要性を目的に当たりとした格好だ。

村尾教授によれば、テレビで伝わるコメントは長くて「ワンセンテンス20秒」。キャスター時代は、原稿を削りに削ってポ

に、政策を選択しなくてはならない。

連合は、結成30年の節目に策定する連合新ビジョンで「未来は変えられる」と投げかけた。一人ひとりの一票で未来をつくる。それが、2019年選挙における投票の意義であることを、しっかり共有しておきたい。

どうする、低い日本の投票率

「若い人たちの投票率が特に低い」。

日本の投票率は、諸外国と比較しても低いのが現実。そして、特に、若年層の投票率が低いのが特徴だ。「18歳選挙権」導入後、初めての国政選挙となった2016年7月の参議院選挙は一つの契機となったが、全体の投票率が54%台だった一方、18〜19歳の投票率は、46%台にとどまっている。ただし、一方的に若い人たちが批判するだけでは何の解決にもならない。各国の投票率は、その国に備わる「主権者意識」の高さ、低さを表したものであるからだ。学校で高校生が模擬投票をする光景も珍しくなくなったが、「投票行動」を支える一人ひとりの「意識」が小さい頃から育まれているのが最も重要だ。その意識とは、社会に転がるさまざまな課題を自分に引き付けて、自分

イントを絞り込む日々だったという。昨年始めたInstagramも事実だけを発信。「日本の食糧自給率は38%」、それで終わり。「自給率を上げて、日本の食文化を守るう」なんて、上から目線の呼びかけもなし。一方、私たち組合役員は、とかく、基本情報はみんな共有しているものと思ひ込み、話をしてみいがちだ。でも、「若い世代は知らない」と村尾教授は指摘する。それを前提に事実だけを発信するほうがインパクトをもって伝わりと…。

大事なことは、自らが考えるきっかけづくり。同じ目線で情報を絞ることで、結果として、深い理解や具体的行動につながる。私たちの「伝え方」「届かせ方」を見直す大事なヒントともなった。

みんなの声を届けるために

「一人ひとりと政治との関係は？」

「参加」がキーワードとなるはずだ。私たちは、できるだけ多くの仲間に参加してほしいと考え日々行動している。だからこそ、皆が参加する働く場をより健全で安全なものにと努力する。そして「働く」ことを通じて、地域や社会に参加する。そして、そこから見えてくるさまざまな不安や不条理を解決するには、政治への参加が不可欠となる。選挙が近づくと各党の個々の政策がフォーカスされるが、人口減少・超少子高齢社会を迎え、情報技術が急速に進展

する現在、どういう社会をめざすのか国民レベルでビジョンを共有する必要がある。政治には、さまざまな考え方や利害を調整し、全体の答えとして導く役割がある。時代の転換期における政治の任務を再確認したい。

気持ち動き心が通う

タイミングを

「職場や地域で「投票へ行こう」運動にどう取り組む？」

「投票へ行こう」と呼びかけるだけでは心に届かない。気持ちを動かすには、やはり伝え方が大切だ。

人の気持ちは、どういう時に動くのか。仕事でへこんでいる時に面倒な話はごめん。コンディションは人それぞれ。目線を合わせ、心が響き合うタイミングはいつか。職場の日々の風景や変化、働く人たちの息遣いを肌身で感じとれるのが、職場の最先端の組合役員。「投票へ行こう」につながるストーリーの出発点にしたい。「自分が困っている問題を解決したい」「今の政治を変えたい」「信頼する人に頼まれた」……。それは幾通りもある。日々の仕事や生活で誰もが経験していることの中から、きつと見つけることができる。

「一票を固める」とは、一人ひとりのつながりを深めること。それは、政治への参加の「扉」を一緒になって開いていくことに他ならない。